

愛知県半田市に「赤レンガ建物」と呼ばれる古い構造物がある。明治の巨匠・妻木頼黄が設計し、「カブトビール」の製造工場として生まれた。今は経済産業省の近代化産業遺産に認定され、観光施設としてにぎわっている。

筆者は二十代の頃、半田支局に赴任した。当時、赤レンガ建物は存亡の機にひんしていた。市が購入したものの、大規模な耐震工事が不可欠。財政難で「取り壊した方がいい」との声もあり、先行きは不透明だった。そんな中、手弁当で保存運動に取り組む市民グループの頑張りに触発され、建物の来歴を探る「赤レンガ、108歳」という連載

赤レンガ、120歳

記事を書いた。

そんな「彼」が今年、百二十歳の誕生日を迎えた。そのパーティーに誘われ、かつて取材した面々と久しぶりにお会いした。スピーチでは、建物に関わったさまざまな人が次々と熱い思いを語った。筆者も突如ご指名を受け、緊張しながらマイクを握った。

なぜ文化財を守るのか。もちろん観光資源にして地域経済をまわす効能もあるだろう。しかし一番の理由は、古今東西の人の縁と想いを固く結んでくれる「くさび」だからじゃないか。復刻版カブトビールが注がれたグラスを何杯も干しながら、そんなことを考えた。（岡村淳司）

文化彩々